

僕の部屋にも電燈が引いてなかつた。

据えランプが床の間に据えてある。

僕はマツチを擦らねばならなかつた。

それも四つ這ひになつて手探りで探す。

そうしてゐる間にも女が飛び出して逃げて歸るかも知れないので氣が氣でなかつた。

ずつと部屋の奥へ女を入れて、

『もう仕方がないから一緒に寝よう』と僕は言つた。

父が物音を聞き付けて、手燭をつけて、木刀や布團を部屋の外まで持つて來て、

『靜かに休まないよ、此處には居れなくなるぞ』とか何とか言つて歸つた。

父に見えない様に、僕は女を僕の後にかませてゐた。

それからランプに火を付けて、女が珍らしそうに、幾らか氣分を落ちつけたものか、額縁にした書翰や、壁に貼り付けた畫を、もつと好く見せてくれと言つて、ランプをかざして見たり、そして這入つて來た廣間の方の様子も何んなか知りたいからと言つて、僕にランプを持たせて、部